

東京YMCA



2019年

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体的全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。



強風の中で

台風の影響で風が強く、安全のためテントは張らず、途中でスタートゲートもステージのパナールも撤去しての開催となりました。



こども最多

レース前の「こどもラン」には過去最多となる500人超の幼児・小学生とその保護者あわせて800人が参加。1.3キロのコースを走りました。

詳細はホームページで⇒

- ・入賞チーム一覧
- ・参加・協賛一覧
- ・フォトギャラリーなど



<http://tokyo.ymca.or.jp/support/2019/09/20190924.html>



第33回インターナショナル・チャリティーラン

障がい者支援に 1600人来場

国籍、年齢、障がい越えて

障がいのある子どもたちを支援するため「第33回東京YMCAインターナショナル・チャリティーラン」を9月23日（月祝）、都立木場公園で開催。50チーム340人のランナーと伴走者が走り出した。「こどもラン」には過去最多となる500人超の幼児・小学生と保護者計800人が参加。応援者やボランティアを合わせると来場者は1600人を越え、今年もにぎやかな大会となりました。

この日は台風の影響で風が強く、スタートゲートも途中で撤去しましたが、心配された雨は降らず、時折日差しも見える陽気となり、会場には笑顔があふれました。

この大会は、障がいのある子どもたちを支援すると共に、「障がい」への社会的関心を高めることを目的に1987年から開催しているもので、現在は全国21のYMCAで行なわれ年1万4000人が参加。益金はYMCAの特別支援活動に参加する約5000人の子どものために用いられています。

東京大会は1チーム6人の駅伝で、1人約1・3キロ走ります。当初から国籍、年齢、障がいの有無によらず多彩なチームが共に走ることを特徴としてきましたが、今年は特に障がいのある方のランニングクラブ「パンパンクラブ」の皆さんが、三菱商事の協賛を得て3チーム参加。東京YMCAのランナーと合わせると約40人の障がいのある方が力走。支援する・支援されるという枠を越えて誰もが共に楽しむ大会となりました。

物品による協賛も多数いただきました。多くの方の温かな心に支えられ、今年も無事に開催できましたこと、感謝して報告します。

〔広報室〕▼4面II「参加協賛一覧」

参加者の声

チャリティーランが支援する活動の一つ、知的障がいのある子どもたちの野外活動「シャボン玉」から、メンバーとボランティアが出場。感想を聞きました。

走ってよかった。最高だった。

さいとう ゆうき 齋藤 由葵くん（14歳）

——チャリティーランはどうでしたか？ 「最高だったです」。満面の笑顔で即答してくれた由葵君。チャリティーランには自ら立候補。インタビューには「照れる」と言いながらも、大会のユニフォームを着て快く応じてくれました。

YMCAに通い始めたのは3年ほど前から。水が嫌いでプールの日は学校も行けないほどだったため、YMCAの水泳クラスに来たのだとか。今ではすっかり泳げるようになり、月に一

度の野外活動にも参加。サマーキャンプやスキーにも挑戦しています。「生後3日目から高熱が続き、歩けるようになるのだろうかと心配しながらの子育てでした」と母・恵美子さん。「泳げるようになって、走れるようになって、こんなに大きな大会にも出場できた。大勢の方に応援していただいて本当に嬉しかった。感謝の気持ちでいっぱいです。YMCAでは学校以外のたくさんの人と知り合える。世界が広がっていきます」。



由葵君（左から2番目）と一緒に走った野外活動のボランティアたち。石井さんは右端。古橋さんは左から3番目。

<由葵君と走ったボランティアの声>

*（ ）内はキャンプネーム

●古橋一貴さん 大学1年生（ボイスリーダー）＊

初めて伴走者として走りましたが、難しかったです。一緒に走った由葵君は下見の時から走りたくてたまらない様子で、自分の出番がくるのをうずうずしながら待っていました。いざ出番になるとスピードを出し過ぎて、途中でペースダウンしてしまったけれども、最後まで励まし合いながら走りました。たくさんの人の応援も嬉しかったようです。ゴールした時は疲れた様子でしたが、数分も経たないうちに「もう1回走りたい!」と。楽しかったんだなと、ぼくも嬉しくなりました。

●石井翔悟さん 大学2年生（くろしおリーダー）＊

チャリティーランでは、由葵君や他のボランティアリーダーと一緒にチームを組んで走りました。由葵君が本当に一生懸命だったので、他のランナーたちも「がんばろう」って団結できた気がします。「シャボン玉」の活動でも、由葵君の周りには自然と皆が集まってきて話かけたりと、あったかい繋がりができてくる。毎月会うのが楽しみです。大会後、由葵君が「かっこよかったです。また行きたいです」って手紙を書いてくれました。ぼくの宝物です。

つた益金は障がいのある子どもたちの支援のために使われます▼10月、11月には各センターで秋まつりやバザーが開催されます。ご家族やご友人を誘って出かけてみませんか？YMCAを支える幅広い年齢層の人たちが楽しそうに関わっている姿を見ることができるよう。新しい出会いはもちろん、OBやOG、旧友に再会するチャンスがあるかもしれません▼普段は会えなくても、ここへ来ればあなたを迎えてくれる場所がある。それがYMCAです。どんな年齢の人にも「居場所があること」を覚えていてください。ね。（評議員／東京たんぼぼYサービスクラブ 小原史奈子）

赤△三角

秋になり、東京YMCAの各種イベントで多くの皆さんと一緒に活動する機会が増えています。先月はJR新宿駅周辺で行われた国際協力街頭募金で、小さなお子さんを始め、学生、スタッフ、たくさんのボランティアの方と共に街頭に立ち、バンクグラデシユの子どもたちのために募金を呼びかけました▼また木場公園でのインターナショナル・チャリティーランでは、走る人、応援する人、会場を整える人、大会を成功させるためにいろいろな人が得意分野で活躍しました。自分たちも楽しみながら、集

■「平和」に向け、できること積み上げたい

山口温子（キャナルコート保育園）＊写真中央

大会前に35歳以下を対象に行なわれた「ユースアッセンブリー」の礼拝の中で、「自分の言葉で“平和”を記入しよう」と白い模造紙が用意されました。それぞれの国の言葉、そしてそれぞれ個人の考えが、カラフルな文字で書き込まれました。私たちは、それぞれの環境の中で問題を抱えています。インドネシアの10代前半の少女の婚姻の問題や、日本の学校のいじめ問題、香港と中国の問題など、グループワークの中で様々なことを話し合いました。私たちが今回話し合っ解決できることではないと思いますが、問題を共有し共に考えることこそが大切だと感じました。それぞれが考える“平和”に向けて、それぞれができることを積み上げていく。私ができることは、まず、周りの人々に今回のことを伝えていくことだと思いました。



■Y M C Aのアイデンティティ問い直す機会に

張 津（にほんご学院）＊写真左端

選択プログラムで参加した「Y M C A運動のキリスト教基盤」というフォーラムで、インドY M C Aの主事から「Y M C Aの事業が目指すのは、人道的福祉支援なのか、もしくは神の御国の拡大における主の栄光なのか」という問いかけがあり、あらためてキリスト教を基盤としている意味、またキリスト教がどのように平和文化や世界平和に関連するのかを考えさせられました。



聖書には、「平和を作る人は幸いです。その人は神の子どもと呼ばれるからです。」（マタイによる福音書5：9「新改訳1970」）とあります。イエスが人となられたのは、神と罪にある人間との間に和解と平和をもたらすためでした。それが神の栄光に繋がるからです。義と聖である神の前で、人に平和はなく、あるのは罪の報酬である死と裁きです。しかしイエスの完璧な生涯と十字架の死、復活により、神と人の間との平和が可能とされました。1856年に世界同盟で採択された「パリ基準」に示されたY M C Aのアイデンティティに則り、イエスのように神に従い、救いのメッセージを述べ伝え、御国を拡大する、真の平和を作る人になりたいと思われました。

第20回アジア・太平洋Y M C A大会

21カ国377人来日 “平和に向かって共に生きる”テーマに



9月2日～6日、「第20回アジア・太平洋Y M C A大会」が日本Y M C A同盟東山荘にて開催され、アジア21カ国から377人が集った。東京Y M C Aからは会員、職員、ユースボランティアリーダー合わせて18人が参加した。「自然の恵みに抱かれ、平和に向かって共に生きる」のテーマのもと、ステイブン・リーパー氏（元広島平和文化センター理事長）による基調講演、グループワーク、テーマ別のワークショップ、エクスポージャー（フィードバック）などのプログラムが持たれたほか、アジア・太平洋Y M C A同盟の新役員選挙も行われ、台湾のチェン・チンソン氏が新会長に就任した。

また本大会前の8月31日～9月2日には、35歳以下のユースを対象とした「ユースアッセンブリー」が渋谷区のオリンピック記念青少年総合センターで開催され、各国から100人（東京からは8人）のユースが参加。今後のY M C A運動の担い手となる若い世代が、多角的な学びと豊かな交流の時間を共有した。東京からの参加者に感想をきいた。（国際部 戸坂昇子）

■ユースの可能性を実感

山村 芽衣花（ボランティアリーダー）＊写真左端

私がこの大会で一番強く感じたことはユースの可能性です。各国から集まったユースと、「YMCAが掲げるチャレンジ21を実現するために私たちに何ができるか」について議論をしました。ユース自身が多くのことに興味を持ち、問題意識を持つこと、そしてなにか小さなことでもアクションを起こすことがより良い未来に繋がるのではないかと思います。他国のユースは自国の社会問題について問題意識が強い印象を受けました。なぜなら、その問題は生活と直結している問題で、貧困、人身売買など生活の中で現実として起きていることに立ち向かっているからです。



恵まれた環境にある日本では、なかなか日本の外で起きている現状に注視することを忘れがちです。今回の経験をもとに、私は普段から子どもと関わる環境にあるリーダーとして、目の前の子どもたち、そして自分自身の未来のためにもよりよい道を作るため、仲間を巻き込みながら考え続けていきたいと思います。

優等生じゃないからできること

子育てコラム



私は東京都町田市で生まれ育ちました。当時の町田市は治安もあまり良くなく、私の小中学校にもヤンチャな友達が多くいました。一緒にいた私ももちろん優等生ではありませんでした。

見た目が派手な友達は、保護者から「あの子たちと一緒にいるのは良くない」「遊ぶのはやめなさい」と言われることもありましたが、そんな友達が誰か

よりも友達思いで、仲間を大切にしていました。当時の私は、「大人は人を見た目で判断する。中身なんて誰もみていない」と思っていました。そんな時、私の母親が「みんな優しくて良い子たちなのに、見せ方が下手で損してるよね。もっと中身で評価してもらえれば良いのにね」と言うのを聞き、安心したことを覚えています。

その後、父親の影響で保育の専門学校に進んだ私ですが、将来本当に保育士で良いのか悩んでいた時に、彼らが「絶対向いてるよ！お前みたいなやつのはうがおれらみたいなやつのもっと考えられる」と背中を押してくれました。

彼はその後、高校を受験せず、フィリピンに留学し、今では海外のネットバンクの会社に勤め立派に働いています。彼が帰国した際に再会すると、「先のこととを考えて海外に行つて良かった。あのままだったら高校も中退していたと思う。あの時気付けて良かった」と話していました。

児童館や学童クラブで働き十数年が立ち、今までたくさんの子どもたちと関わってきたが、子どもとの関わり方に正解はありません。毎日が試行錯誤と反省の繰り返しです。それでも優等生じゃなかった私だからこそ、気付けることができる関わり方があると信じ、これからも日々子どもたちと向き合い、人は見た目じゃない！中身を見てあげて欲しいと、子どもだけでなく、保護者にも伝えていければと思っています。

東雲第二学童クラブ 主任 北島 嘉人



総主事カフェ

東京Y M C A総主事

菅谷 淳

総主事カフェにようこそ。今年7月、初孫（長男の子）が生まれたので親しい人にお知らせしようということになり、過去の年賀状をばらばらとめくっていました。すると3年前に亡くなった父からの年賀状が出てきて、余白に「長寿のお祝いをありがとう、とても嬉しかったですよ」と添え書きがありました。

それを見て思い出しました。父が亡くなる前の年、高校・大学と一緒だ

った新潟の親友がまた出張で東京し、門前仲町で飲んだことがありました。そこで彼が「親父さんとお袋さんに何かお祝いの会をしたか？」と聞いてきたので「まあ、2年後父が88歳になった時に長寿のお祝いでもしようかな」と答えると珍しく彼は強い口調で、「それはダメだよ。思っ

たらずぐにお祝いの会をした方がいい」と言いました。私はちよつとムツとしましたが、彼のアドバイスに従い、数か月後

父母のために「長寿のお祝い」を家族でやりました。海の幸が美味しい料理屋でちよつと贅沢なお膳を囲み、子どもたちが一人ずつ感謝を述べたという会です。父が「のどろろ」を美味しそうに食べていたのを覚えています。その翌年の春先、父は脳梗塞で倒れました。一旦は持ち直しましたがリハビリむなしく亡くなりました。その2年後、後を追うように母も癌で亡くなりました。もし父が88歳になるのを待っていたら「長寿のお祝い」は叶いませんでした。お葬式に来てくれた親友にそのことを話し、心から感謝しました。身近な人や家族ほどお世話になっている人はいないのに、なかなか感謝の気持ちは伝えられませんが、予告なく確実にやってきます。父からの年賀状は亡くなる前のものなのに、今日届いたような不思議な感じがしました。

